



東京女子大キャンパス  
の旧「東寮」(5号館)



東京女子大学(東京・杉並区)にある1924年完成の旧学生寮「東寮」が、キャンパス整備計画で来年、取り壊されることになった。卒業生で作家の永井路子さん、東寮OGの瀬戸内寂聴さんなどを発起人に保

存運動が起き、建築史家らの団体も要望書を提出しているが、大学側は予定通り計画を進める考えだ。

同大の建築群は、チェコ生まれの米国人建築家アントニン・レーモンドが1920〜30年代に設計した。2階建ての東寮は、関東大震災前の着工には珍しく鉄筋コンクリート造り。中庭を囲んで3畳間が102室あった。日本初の女子個

### 東京女子大・旧学生寮の解体計画

## 女性史の記念碑 どうなる？

室寮で、瞑想と内省を重んじた初代学長・新渡戸稲造の教育理念を体現しているという。現在は主にサークル室となり、一室だけ当時の状態を保存する。西寮もあったが1984年に取り壊された。現存するレモンド建築のうち、7棟は国の登録有形文化財になっている。しかし旧東寮(5号館)と、隣接の旧体育館(13号館)は整備計画を見込み、大学

が文化財指定を申請していなかった。同大の説明によると07年にキャンパスを統合し、教室や研究室が恒常的に不足。敷地に余裕がなく、老朽化が進む7棟を取り壊して新しい教室・研究棟を建てるという。残る7棟は毎年1棟ずつ、大規模改修と耐震補強を実施する。

史の視点からも記念碑的な建物」として旧体育館とともに保存を要望。署名活動を続けている。代表で東寮OGのジャーナリスト、藤原房子さんは「個人の自主性が尊重され、女子にとって画期的な自治寮だった。文化的・歴史的价值の高い建物を、むざむざと壊していいものだろうか」と話す。西寮OGの永井路子さんも「女性の進学がまだまだ認められな

った大正期に建てられ、大きく言えば日本精神史の波を受けた建物。ただの感傷から保存を求めるのではない」と語っている。

20世紀の建築遺産の保存を訴える「ドコモ・ジャパン」(代表＝鈴木博之・東京大学教授)も、当時チェコで流行した建築意匠を用いるなど「建築史上および技術史上において注目される」として、東寮の保存を求めている。

これに対し大学側は「建築的価値や卒業生の気持ちは分かる」としながらも、「敷地や資金に限界があり、計画を進めざるを得ない。現在と将来の学生のため、教育環境の充実を図りたい」(桃井明男事務局長)としている。

(高野清見)



アントニン・レーモンド 1888〜1976。旧帝国ホテルの設計者フランク・ロイド・ライトの弟子で、戦前に来日。群馬音楽センター、星薬科大学などのモダニズム建築を設計し、前川国男、吉村順三など日本人建築家も育てた。